

その時です。庭師は、陽気にほほえんでいるひなぎくに気づきました。「かわいいひなぎくよ、周りのみんなが悲しんでいるのに、どうしてこんなに元気なんだい？」

すると、ひなぎくは言いました。「わたしはただの小さなひなぎくですが、今朝、こう思ったんです。もし庭師さんが、ほかの花か木がよかつたら、ほかのを植えていたでしょう？ だけど、わたしを植えてくださいました。だから、自分のできる限りをつくして、最高のひなぎくになろうと思ったんです！」

庭師は、そんな小さな花でも、彼の大きな庭園にいるのを感謝しているのを見て、うれしくなった。庭師はみんなを見回して言った。「わたしの草木たちよ、はずかしくないのかい？ ひなぎくはこんなに小さいのに、めめめせず、自分の造られたさまを喜び、感謝してるんだ！」

すると、今まで不平を言っていた木々が口々に言いました。「自分が造られたさまについて、もう決めて、ぐちをこぼしたり、ぼやいたりしません。植えられたことを感謝します！」

教訓：自分を周りの人と比べたりせず、元気を出して、喜ぼう。そして、最高の自分になろう。自分にあるものをすべて、感謝しよう。

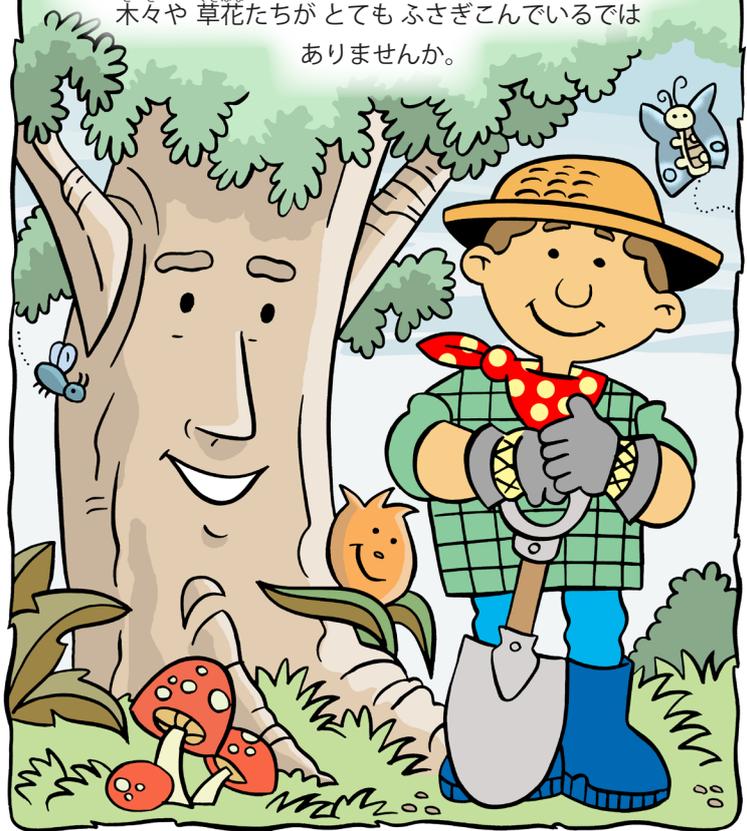
祈り：イエス様、わたしのくらしにあふれているすべての良いものを感謝します。わたしを救い、またあなたの愛について教えるために地上に来てくださったことを感謝します。どうか、わたしの心の中に入ってきてください。そして、わたしの毎日のくらしをあなたの愛で満たしてください。アメン。

訪れてみてください：www.family.gr.jp/  
電子メール：mail@family.gr.jp  
さし絵：ディディエ・マーティン。再話：カチューシャ・ジュスティ。  
デザイン：アリアクセイ・コラン  
Copyright © 2010年、ファミリーインターナショナル。  
このトラクトは、自由に複製して配布することができます。



## てい えん 庭園

庭園の手入れを、それはそれはこまめにしている庭師がいました。ところが、ある朝庭園に行ってみると、木々や草花たちがとてもふさぎこんでいるではありませんか。



その時です。庭師は、陽気にほほえんでいるひなぎくに気づきました。「かわいいひなぎくよ、周りのみんなが悲しんでいるのに、どうしてこんなに元気なんだい？」

すると、ひなぎくは言いました。「わたしはただの小さなひなぎくですが、今朝、こう思ったんです。もし庭師さんが、ほかの花か木がよかつたら、ほかのを植えていたでしょう？ だけど、わたしを植えてくださいました。だから、自分のできる限りをつくして、最高のひなぎくになろうと思ったんです！」

庭師は、そんな小さな花でも、彼の大きな庭園にいるのを感謝しているのを見て、うれしくなった。庭師はみんなを見回して言った。「わたしの草木たちよ、はずかしくないのかい？ ひなぎくはこんなに小さいのに、めめめせず、自分の造られたさまを喜び、感謝してるんだ！」

すると、今まで不平を言っていた木々が口々に言いました。「自分が造られたさまについて、もう決めて、ぐちをこぼしたり、ぼやいたりしません。植えられたことを感謝します！」

教訓：自分を周りの人と比べたりせず、元気を出して、喜ぼう。そして、最高の自分になろう。自分にあるものをすべて、感謝しよう。

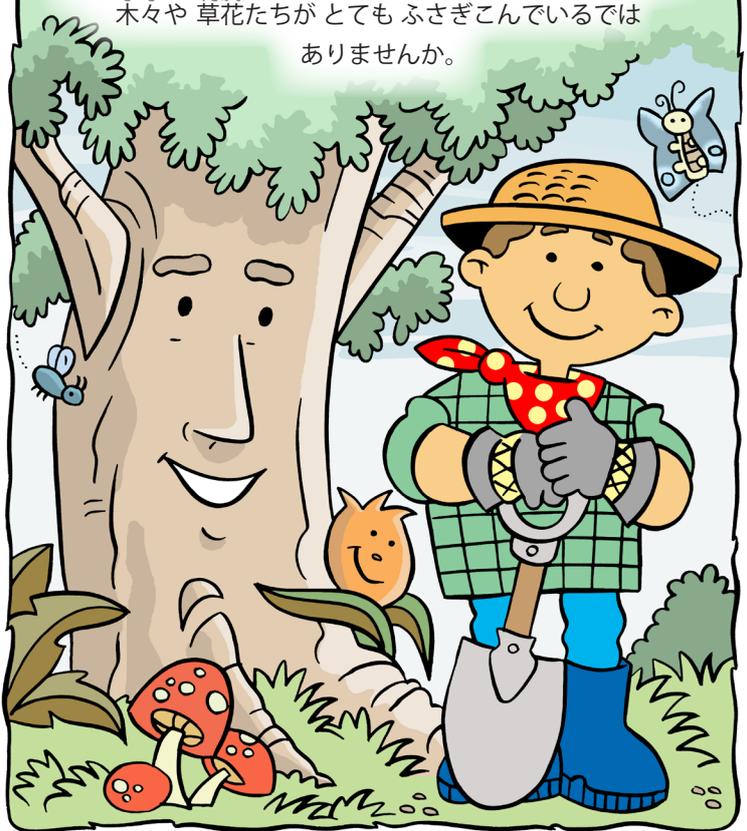
祈り：イエス様、わたしのくらしにあふれているすべての良いものを感謝します。わたしを救い、またあなたの愛について教えるために地上に来てくださったことを感謝します。どうか、わたしの心の中に入ってきてください。そして、わたしの毎日のくらしをあなたの愛で満たしてください。アメン。

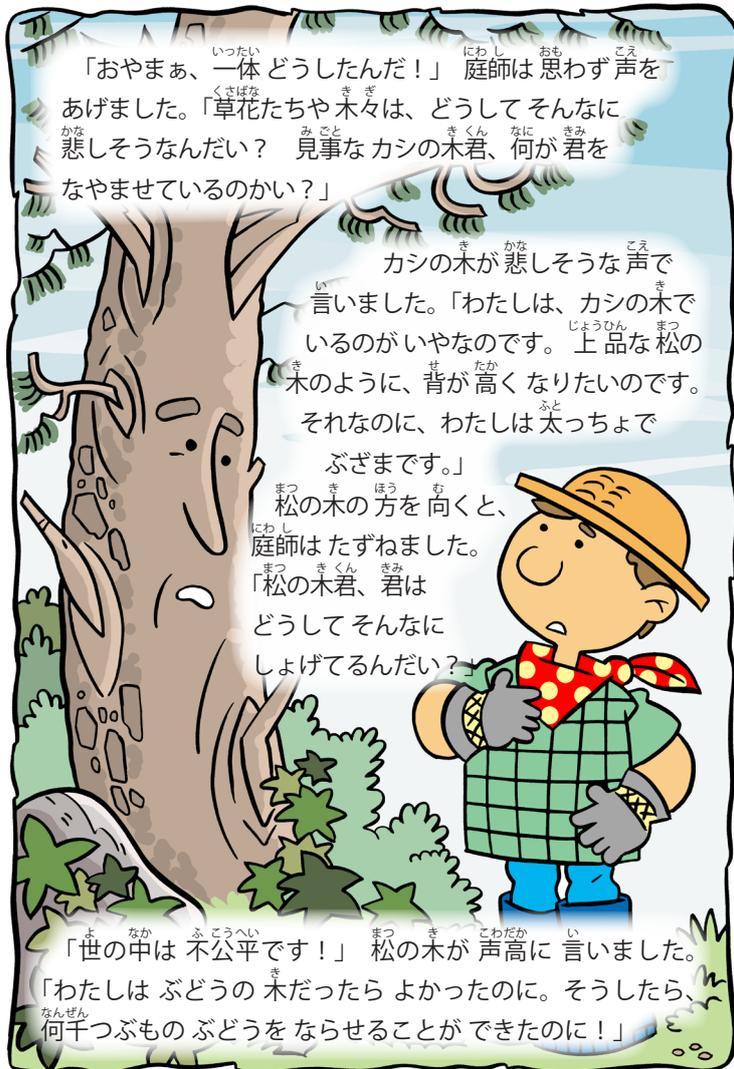
訪れてみてください：www.family.gr.jp/  
電子メール：mail@family.gr.jp  
さし絵：ディディエ・マーティン。再話：カチューシャ・ジュスティ。  
デザイン：アリアクセイ・コラン  
Copyright © 2010年、ファミリーインターナショナル。  
このトラクトは、自由に複製して配布することができます。



## てい えん 庭園

庭園の手入れを、それはそれはこまめにしている庭師がいました。ところが、ある朝庭園に行ってみると、木々や草花たちがとてもふさぎこんでいるではありませんか。

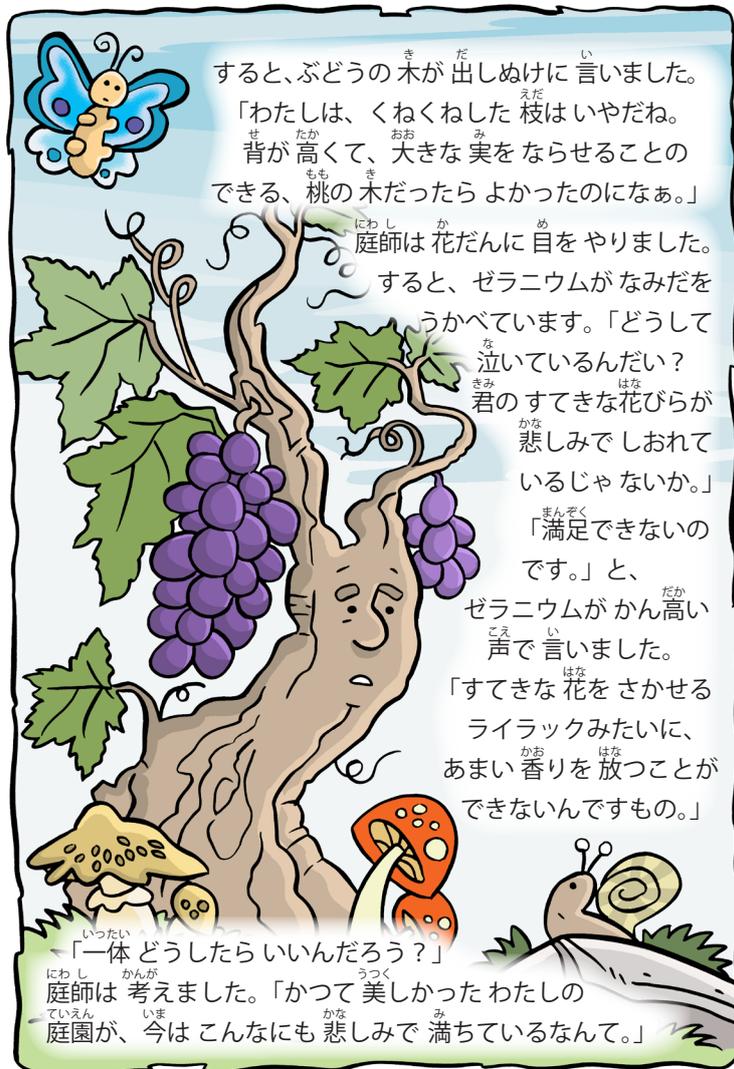




「おやまあ、一体 どうしたんだ！」庭師は思わず声をあげました。「草花たちや木々は、どうしてそんなに悲しそうなんだい？ 見事なカシの木君、何が君をなやませているのかい？」

カシの木が悲しそうな声で言いました。「わたしは、カシの木でいるのがいやなのです。上品な松の木のように、背が高くなりたいのです。それなのに、わたしは太っちょでぶざまです。」  
松の木のほうを向くと、庭師はたずねました。「松の木君、君はどうしてそんなにしょげてるんだい？」

「世の中は不公平です！」松の木が声高に言いました。「わたしはぶどうの木だったらよかったのに。そうしたら、何千つづものぶどうをならせることができたのに！」



すると、ぶどうの木が出しぬげに言いました。「わたしは、くねくねした枝はいやだね。背が高くて、大きな実をならせることのできる、桃の木だったらよかったのになあ。」

庭師は花だんに目をやりました。すると、ゼラニウムがなみだをうかべています。「どうして泣いているんだい？ 君のすてきな花びらが悲しみでしおれているじゃないか。」  
「満足できないのです。」と、ゼラニウムがかん高い声で言いました。「すてきな花をさかせるライラックみたいに、あまい香りを放つことができないんですもの。」

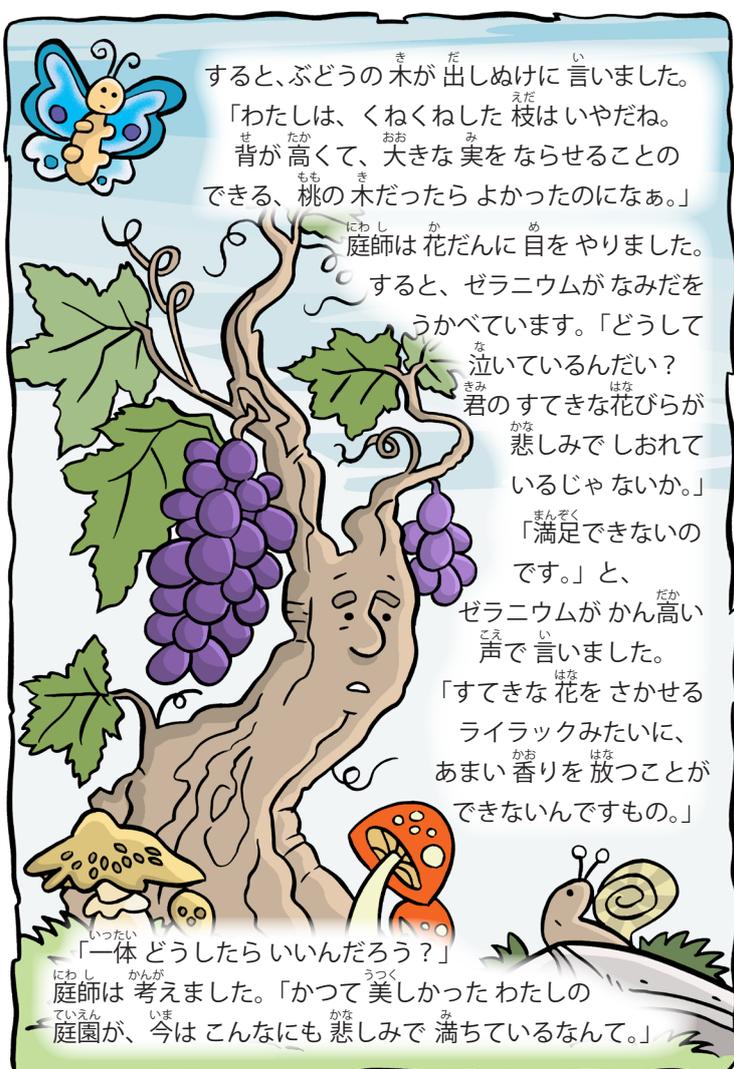
「一体 どうしたらいいんだろう？」  
庭師は考えました。「かつて美しかったわたしの庭園が、今はこんなにも悲しみで満ちているなんて。」



「おやまあ、一体 どうしたんだ！」庭師は思わず声をあげました。「草花たちや木々は、どうしてそんなに悲しそうなんだい？ 見事なカシの木君、何が君をなやませているのかい？」

カシの木が悲しそうな声で言いました。「わたしは、カシの木でいるのがいやなのです。上品な松の木のように、背が高くなりたいのです。それなのに、わたしは太っちょでぶざまです。」  
松の木のほうを向くと、庭師はたずねました。「松の木君、君はどうしてそんなにしょげてるんだい？」

「世の中は不公平です！」松の木が声高に言いました。「わたしはぶどうの木だったらよかったのに。そうしたら、何千つづものぶどうをならせることができたのに！」



すると、ぶどうの木が出しぬげに言いました。「わたしは、くねくねした枝はいやだね。背が高くて、大きな実をならせることのできる、桃の木だったらよかったのになあ。」

庭師は花だんに目をやりました。すると、ゼラニウムがなみだをうかべています。「どうして泣いているんだい？ 君のすてきな花びらが悲しみでしおれているじゃないか。」  
「満足できないのです。」と、ゼラニウムがかん高い声で言いました。「すてきな花をさかせるライラックみたいに、あまい香りを放つことができないんですもの。」

「一体 どうしたらいいんだろう？」  
庭師は考えました。「かつて美しかったわたしの庭園が、今はこんなにも悲しみで満ちているなんて。」